

# 発展学習を取り入れた中学校古文の授業

間瀬 由美

## 1 はじめに

中学校での初めての古典の授業は、生徒に楽しいと思わせたいし、これからの古典学習につながる「構え」も作りたい。稿者の場合は、なるべく多くの古文に触れさせたいという思いもある。一方、中学校入学後半年が過ぎると生徒の課題もよく見える。学力差が大きいこと、そこからくる授業のやりにくさ、生徒それぞれの読みの力を伸ばせていないという感覚……。本稿は、これらを少しでも解決しようとして試みた古典の発展学習についてまとめたものである。

### 中学生と古典

稿者は、古典の学習で、「テキストを相対化し、歴史的・社会的なコンテキストにおいて読むこと。今の自分と、当時の価値観の中にいる語り手とを対峙させ、自分についての考えを深めること」を目標にしたいと考えている。これは、高校で古典の授業をする際の目標であった。

現在、小学校では「伝統的言語文化」の学習に時間が割かれてい

るため、生徒たちも古文の音読や有名作品の冒頭部分の暗唱学習を経験している。中学校での古文の学習は、このような経験も踏まえ、高校の学習につながるようにしたい。そこで、「小学校での経験を生かして音読を楽しむ、中学校で学ぶ言語事項を用いて、古文の口語訳に積極的に挑戦すること。口語訳も利用して多くの古典を読み、面白さや親しみを感じることに。さらに、古文を読む中で感じるであろう現代の自分との違いを意識すること（この点がこの後の高校古典の目標にある「批評」につながる）」。このような姿勢で、古典の授業に向かった。

### 生徒の現状と課題

武田中学校は私立の中高一貫校であり、ほぼ全員がそのまま高校に進学する。昨年度の中学一年生は人数も一クラス二十人程度と少なく、のんびりとした雰囲気の中、穏やかな生徒が多い。人数が少ないので、生徒が書いたものにコメントしたり感想をフィードバックしたりなど、一人一人を見ることができる。しかし、気になる点もある。次の通りである。

①学力差について。

学力差が大きい。基礎的事項は同じ課題で同じレベルまで理解させたいと思うが、理解度・スピードともに差が大きく難しい。クラスのどの辺りに合わせて授業を行うかはどの学校でも課題であるが、中間層が少なく、理解度が高い生徒と低い生徒、大きく二つに分かれている状況がある。

②反応について。

稿者が問いを投げかけると、半数の生徒が先を争い答える。発言が多く活発に見えるが、テキストの表現を吟味せず、思いっくままに言って満足する。個の発言ばかりで深まりがない。

③考える問いについて。

②とは逆に、じっくり考えなければならぬ問いにはなかなか答えない。理解度の高い生徒は遠慮するのか黙り込み、理解度の低い生徒は問いの意味がわからないまま黙り込む。

これらの問題点を解決し、生徒の読みの力を伸ばしたいと次のような手立てを考えた。これが発展学習につながった。

①一斉学習で共通の教材に取り組んだ後、個別に異なる課題に取り組む。皆と同じではない自分の課題があることで、積極的に課題に向かうことができ、結果、自力で答えられる問いに答えようとするだろうと予想した。

②発展学習では、グループ学習の前に個別で課題に取り組む時間を設ける。思いついたことをすぐに答えて終わりではなく、書く作業を通して、テキストの表現を読み直し、一人でじっくり考える時間を作ろうとした。この時間を設けることで、グループ学習の

場に関心を持ち寄ることになり、話し合いも進むと考えた。

③個別学習の後には、プリントの内容をまとめるグループ学習とする。グループ学習を置くことで、理解度の高い生徒が他の生徒に説明したり意見をまとめたりしなければならぬ状況を作る。理解度の低い生徒も、友人の説明を積極的に理解しようとするであろうし、理解度の高い生徒にとっても、自分の考えを示す自己表現の場となるのではないかと予想による。

ベアの授業者

なお、本稿は、同じ学年を担当したベアの授業者（武田中学校 棚橋治美先生）の存在も大きい。進度の確認だけでなく、目標や生徒の学力、反応分析等も日常の会話であった。古典の単元は、古文は稿者が、漢文は棚橋先生が内容を提案し、それに沿ってそれぞれのクラスで授業をした。また、竹取物語（本稿）→漢文・故事成語（棚橋先生の論稿を参照）→徒然草（本稿）、と単元を進める中で、お互いに影響し合い、学習の内容と方法が変化した。本稿の実践は、このような経緯で行われた。

## 2 単元の概要

### 単元1 「竹取物語」からの展開

- 1 対象 武田中学校1年1組・2組（男子26・女子15）
- 2 時期 平成26年11月
- 3 教材 A・Dは教科書所収。B・Cが発展教材。  
A 「かぐや姫の誕生」

- B 「かぐや姫に求婚する五人の貴公子」(口語訳付き)
- C 「五人の貴公子」それぞれのダイジェスト(口語訳)

資料1

- D 「かぐや姫の昇天」

4 目標(言語事項は省略)

- ① 「五人の貴公子」の話も読み、「竹取物語」の概要を知る。
- ② 「竹取物語」に面白さや親しみを感じ、現代の自分との違いを意識する。

- ③ 一斉学習・個別学習・グループ学習を通して、それぞれの読みの力を伸ばす。

- ④ グループで協力して内容をまとめ、聞き手を意識し分かりやすく発表する。

5 単元の流れ(発展学習は【第2次】)

【第1次】 古文学習の導入

冒頭部分の音読・暗唱。歴史的仮名づかいと口語訳の確認。

【第2次】 「五人の貴公子」の物語を読む

・「かぐや姫に求婚する五人の貴公子」をプリントで読む。(音読・歴史的仮名づかいの学習も行う)

・口語訳のダイジェスト版「五人の貴公子」から自分が担当する貴公子の物語を読み、プリントの問いに答える。グループ学習のことも考慮し、どの人物を担当するかは稿者が決めた。(個別学習) 資料2

・同じ人物を担当する生徒でグループになり、個別学習のプリントを持ち寄って発表準備をする。(グループ学習)

・グループごとに発表。発表を聞き、感想を書く。

【第3次】 「かぐや姫の昇天」を読む

音読・歴史的仮名づかいと口語訳の学習。

——この単元の後、漢文(故事成語)の単元を学習した——

単元Ⅱ 「徒然草」からの展開

- 1 対象 単元Ⅰと同じ。

- 2 時期 平成27年度2月

- 3 教材 Aのみ中学2年生の教科書に所収。B、Dが発展教材。

発展学習の方法は資料3

- A 「猫また」

- B 「仁和寺にある法師」

- C 「丹波に出雲といふところあり」

- D 「猫また」インタビュー記事を作ろう! 資料4

4 目標(言語事項は省略)

① 「竹取物語」の学習を踏まえた個別学習・グループ学習・一斉学習を通して、それぞれの読みの力を伸ばす。

② 「徒然草」の面白さを感じ、筆者の描こうとしたことを読み取る。

③ 発表をよりよくするためにグループで準備を行い、聞き手を意識してわかりやすく発表する。

5 単元の流れ(【第2次】が発展学習)

【第1次】 「猫また」を読む

・音読・歴史的仮名づかい・口語訳の確認。(個別・ペア・全体)

・筆者の描こうとしたテーマを考える。(個別・全体)

【第2次】 希望するコースを選び、発展学習を行う

・3つのコースに分かれ、プリントに沿って個別学習をする。

Aコース：「仁和寺にある法師」を読む

Bコース：「丹波に出雲といふところあり」を読む

Cコース：「猫また」インタビュ記事を作ろう！

A・Bコースは、音読→歴史的仮名づかい→口語訳→筆者が描こうとしたテーマを考える。Cコースは、「猫また」をもう一度読み直し、「猫また事件」を目撃した近所の人になりきって、インタビューに答える。

・同じコースを選択した生徒で3名ずつのグループを作り、個別学習の確認を行い、発表準備とする。

・学習内容の発表。(A・Bは、音読→現代語訳→感想→筆者が描こうとしたテーマ。Cは、インタビューする人とされる人の会話。)

・発表を聞き、それぞれのグループへの評価を書く。

### 3 発展学習の分析と考察

単元Ⅰ・Ⅱそれぞれの発展学習(第2次 個別で問題に取り組み→グループで話し合う→発表)について、生徒が記述したプリントや感想をもとに分析・考察する。

#### 単元Ⅰ

①学習プリントの問いのあり方

「五人の貴公子」学習プリントの問いは、どの人物についても同じで、内容を確認する問い(1～5)、感想(6)、作者がこの人物を通して描きたかったこと(7)、とした(資料2)。確認の問いは、

(1) 人物名

(2) かぐや姫に頼まれた物とその特徴

(3) 頼まれた物をどうやって手に入れたか、実際にはどんな物だったか

(4) どうしてウソがばれたのか

(5) かぐや姫の反応と貴公子のその後

である。人物によっては、問いの答が明記されていないこともあるが、五人の貴公子の話を読んでいくと、1～5の答えを順に埋めることができる。そして、これらの問いで内容を整理できるので、6・7にも答えやすい。授業中、答えられない問いに出会うと、学力が高い生徒は発表者を質問攻めにして何とか答を書こうとし、学力が低い生徒は全く動かなくなってしまうということがよく起こるが、この学習では、ある程度自分の力でプリントに書き込むことができようと思う。学力や学習意欲が低い生徒のためには、必ず答えられる問い、物語の展開を再び追うことができるような問いが必要である。

②挿絵を説明すること

「五人の貴公子」の学習プリントには、国語便覧からそれぞれ物語の挿絵を入れ(資料1)、発表の際に、その挿絵がどのような場面を描いているのか、人物や物も含めて説明させた。発表ではどの班もかなり詳しく絵を説明し、それを聞いた生徒の感想にも、「絵の説明がよかった」等の感想が多く見られた。絵の説明ではあるが、自分の言葉で物語を説明し直す学習になったと思う。

※右大臣阿倍御主人の挿絵の説明(発表用の生徒の原稿より)

この絵は、右大臣阿倍御主人が持ってきた火鼠の皮衣をかぐや姫と姫が見ているところです。姫とかぐや姫の間にあるのが火鼠の皮衣で、台の上に置かれています。ふすまをはさんで隣の部屋には、翁と右大臣が話をしています。姫の着物はいいけど翁の着物はあまりよくない。

③描き分けられた人物像を読み取ること

「自分の感想を書こう」という問いに対して生徒は次のように書いた。(感)としているのは、担当グループが発表した感想ではなく、発表を聞いた生徒の感想である。

一人目 石作の皇子

a 三年の長い間、山にこもって何をしていたかが不思議です。

b 思ってくれることを期待したのかぐや姫が無視したからかわいそう。

二人目 くらもちの皇子

c かぐや姫は本物の枝を取ってこいと言ったのに、くらもちの皇子

は玉の枝を取りに行くふりをして、六人の人と一緒に玉の枝を作って、お礼のお金も払わなかったのでひどい人だ。

d つけられた枝が笑えるほどになったところが急に変わって面白かった。

三人目 右大臣阿倍御主人

e この人もだまされたのでかわいそう。(感)

f 五人の中でうそのばれ方が一番単純。(感)

g かぐや姫の残酷さが分かりました。(感)

四人目 大納言大伴御行

h 他の人と違って、途中でやめるのは勇気があると思った。

i 他の人と違って、自分で挑戦したのはすごい。

j かぐや姫のことをすごく好きだったのに「悪人」と言われて嫌になる。変わり方がおもしろい。

k くらもちの皇子や石作の皇子と違って、正々堂々と龍の所に行ってきたことが偉いな、と思いました。(感)

五人目 中納言石上磨足

l 五人の中でとてもまじめだと思ったが、あまりの運の悪さが無惨だった。

m 一人だけ亡くなったのでかわいそう。かぐや姫もそう思っている。

n せっかくだけ自分で取りに行ったのに、この人だけ死んでしまっ

て、五人目はむなし。(感)

o かぐや姫のために一途にがんばった人。一番まじめな人。(感)

p 大納言大友御行よりもひどい扱いだと思います。(感)

話の内容そのものへの単純な疑問や感想はあまり見られず(a・

cのみ)、大半は人物への評価である。

かぐや姫について書いているのはd。くらもちの皇子との結婚を覚悟して嘆いていたかぐや姫が、玉の枝を偽物と知り、気持ちが一転したという内容を面白がっている。美しいだけのかぐや姫のイメージではなく、危機が去って単純に喜ぶかぐや姫の滑稽な姿を読み取っている。

かぐや姫の要求に応えようと策略を巡らせて失敗する五人の貴公子の話は、同じパターンではあるが、身分が高い順に並べられ、人物の描き分けがなされている。生徒の感想からは、描き分けられた五人の違いが読み取れていることがわかる。

玉の枝を作ることばかり考える自己中心的なくらもちの皇子の身勝手さ(c)、唐の商人が寄こした皮衣を本物だと信じて失敗する阿倍御主人の単純さ(f)や命の危険を感じてかぐや姫への思いが急に冷めた大友御行の単純さ(j)。また、かぐや姫の難題に誠実さをもつて応じたのに命を落とした石上麿足のあわれさ(i・m・n)。石作の皇子(b)は「かわいそう」だとしているが、滑稽さを読み取っているようにも思える。語り手の視線に沿った読みがなされている。五人の貴公子の物語を読むことで、かぐや姫の人物像も多面的にとらえることができたといえる。

#### ④教訓を読み取ってしまおうこと

最後の問い「作者はこの人物を通してどんなことを書きたかったのだろうか」に対する答えには、同じような内容が多く、物語から教訓を受け取った生徒が多かった。生徒の記述から引用する。

一人目 石作の皇子

a 楽をしたら失敗するということ。

b うそをついてもばれてしまうぞ。

二人目 くらもちの皇子

c 自分の欲のためにうそはいけない。

d お金を払って楽をしようと思ってもバレる。

三人目 右大臣阿倍御主人

e (唐の貿易商に騙されて皮衣を手に入れたことに対して) うそをつこうとしたら自分もうそをつかれてしまう。

f (かぐや姫が皮衣を燃やしたら燃えて無くなったことに対して) 結果がわかっているのならやらない方がよい。

四人目 大納言大友御行

g (竜の首の玉を探しに行き失敗、かぐや姫を「悪人」だと言うようになったことに対して) 人の心はすぐ変わる。

h 恋によつて狂わされる人間のおろかさ。

五人目 中納言石上麿足

i 異性に夢中になりすぎて命を落とすおろかさ。

j 異性に夢中になりすぎると命を落とす可能性もある。

五人の貴公子を一人ずつ担当して読んでほしいで、「作者の書きたかったこと」が教訓としてまとまってしまったのかもしれない。しかし、五人を順に並べると規則性があることがわかる。五人は身分が高い順に物語に登場するが、身分が低くなるに従い、かぐや姫の要求への対応は誠実さが増す。かぐや姫を偽り、偽物を差し出した皇子二人から、挑戦しようと努力するが失敗した大納言、亡くなっ

てしまう中納言、のように。生徒の記述を並べ、このような規則性に注目させれば、中学生でも「五人の貴公子」の話から、作者の書きたかったこととして「権力への批判」を発見できたかもしれない。

## 単元Ⅱ

### ①自分で発展学習の課題を選択すること

「徒然草」の発展学習では、三種類の課題を用意し、自分のやりた課題を選択させた。これは、本単元の前、漢文の学習で用いられた方法である。漢文の発展学習では、自分で選んだ課題に対して積極的に取り組む生徒が多く見られたため、同じ方法を採った。難易度を★で表し、選択させた。(漢文の学習と同様)

A コース 「仁和寺にある法師」を読む ★★19名

B コース 「丹波に出雲といふところあり」を読む ★★12名

C コース 「猫また」復習(インタビュー記事を作る) ★10名

AやBは初めて見る古文を自分で読み、作者の伝えたかったことまで考えなければならぬので難易度が高い。さらに、内容と長さからAよりBの方が難しい。Cは既習の「猫また」をもう一度読み、インタビューに答えることで復習ができるので、難易度としては低く、新しい学習が困難な生徒に選んでほしい課題として用意した。しかし、実際に選択させてみると、発表者の意図とは異なり、生徒は難易度をあまり意識していないようだった。A・Bには、まず歴史的仮名づかいを現代仮名づかいに直す課題があり、この課題はどの生徒にとっても取りかかりやすいので、理解度に関係なく選ばれ

たのであろう。一方のCは、近所の人になりきってインタビューに答える、自由に表現する余地のある課題であったため、創作したり表現したりすることが好きな生徒も選んでいる。稿者の意図とは異なる選択が行われたが、この後のグループ学習にはこの選択がうまく働いた。同じ課題を選んだ生徒で作ったグループのメンバーの間に力の差があり、教え合うことができたのである。

### ②法師(上人)のへの同情と批判、教訓を読み取ること

A・Bコースともに、「読んで思ったこと」には法師(上人)の行動に同情や批評を加え、「作者の伝えたかったこと」には、教訓とすべきことを挙げている。

A コース 仁和寺にある法師

「この文章を読んで思ったこと」には、「作者の伝えたかったこと」と同じ「案内する人は必要」というものもあったが、法師の行動に注目し、評価を加えたものもある。滑稽さを指摘(a)、性格を批判(b)、法師への同情(c)である。

a 石清水にお参りしたと勘違いしたことがおもしろかった。

b 行きたいところに行っていないのもう行つたと納得しているところ、思い込みが激しいと思った。

c この法師は真面目だったのにそれが裏目に出たようでかわいそうだと思った。

一方、「作者が伝えたかったこと」に対する生徒の答えは、ほとんどが「どんなことでも案内する人は必要」のように、終わりの一文を引用していた。

Bコース 丹波に出雲といふところあり

「この文章を読んで思ったこと」には、A同様、Bでも、滑稽さを指摘（d）、性格を批判（e・f）、法師への同情（g）が見られた。

d 子供のいたずらなのに感動したところがおもしろかった。

e 獅子の後ろ姿に感動して涙を流したが、本当は子供たちのせいだったというおちがおもしろい。

f 上人は位としては高いのですが、頭は悪いなと思いました。

g 感動を失った上人がかわいそう。

しかし、「作者の伝えたかったこと」は、「仁和寺にある法師」のように最後の一文が作者の評価になっていないため、本文を読んだ感じたことから自分なりの答を導き出したようである。

h 自分の予想や推測だけでよくわからないことを人に言いふらすと後で恥をかく。

i 真実を知らないと最後にはかわいそうなことが起きるぞ！

Cコース 「猫また」のインタビュー記事を作る

A・Bコースの「作者が伝えたかったこと」「読んで思ったこと」の代わりに、Cコースでは、「近所の人からの」法師へのメッセージ。「法師になったつもりで気持ちを答える」の問いを置いた。「それでは最後に、僧へメッセージをお願いします。」には、法師への注意が並んだ。「徒然草」の中の他の文章に影響されたかもしれない。

j 早く帰りなさい。

k しっかりしてくださいね。

l 今後は気をつけてください。

m あんまりうわさを信じすぎない方がいいですよ。

最後の問い「このたびは、大変な目にあわれましたね。襲われた時の状況と今のお気持ちを教えてください。」には、生徒による大きな違いは見られない。しかし、「なりきって書く」が書きやすかったのか、文章中の法師の行動や発言をもとに、間抜けな法師像が見取れる。Cコースの学習は、言葉遣いも含めて楽しみながら書いているということが見て取れた。

n そうそう、怖かったですよ。まさか自分の犬だったとは。一本取られましたね。

o いや、ほんと怖かったですよ。注意しないとと思っていたのにもかかわらず、腰が抜けちゃって川に落ちちゃったんですね。今考えると…犬に申し訳ないです。

### ③発表へのコメント

発表後、発表グループへのコメントを書かせた。コメント表の指示（発表態度・声の大きさ・内容など、気づいたことを書くよう）が原因でもあるが、発表の仕方についてのコメントが並んだ。「声が大きくてよかった」「口語訳がわかりやすく、声も聞き取りやすくてよかったです」「話すスピードがちょうどよかった」など。内容に触れようとしているものでも「感想の内容がよかった」「感想の内容がなるほどなと思いました」のように、どこがどういいのかは説明できていない。

ただ、次のようなコメントもある。「Tくんの（発表した）「作者が伝えたいこと」はすごくよく読んでいるなと思いました」「作者が伝えたいことをしっかりと言っていると思いました」が、みんな上人

を批判するけど、もっと上人の考え方も見た方がいいと思いました」  
「作者の伝えたいことは、私の考えと一緒にした」。これらは「作者の伝えたいこと」をもう一度見直したり、本文を読み返すきっかけとなり得るコメントである。発表で終わらず、もう一度一斉学習をして内容を深めることもできると感じた。

#### 4 おわりに―成果と課題―

##### ①発展学習について

教科書以外の文章も読ませたことには成果があった。「竹取物語」で言えば、五人の貴公子の話によって、古文の中に描かれた様々な人物に触れ、その人物に対して多様な感想を持つことができた。生徒にとって「竹取物語」は「竹の中から出てきたかぐや姫が月に帰る話」ではなくなったと思う。ただし、読みを深めるためには、発表後に何らかの手立てが必要だと感じた。生徒の発表の中には、内容を深めるきっかけとなるような発言や感想もあった。これらを生かし、もう一度、本文に戻ることができれば読みを深めることもできる。時間はかけられなくても、もう一度本文に戻れるような場面を用意したい。

##### ②グループ学習について

生徒たちがよく聞いているのは、単に「竹取物語」や「徒然草」の説明ではなく、クラスメートによる「竹取物語」や「徒然草」の説明である。これは、発表を聞いた感想の中に「Sくんの…」や「Tくんが…」などクラスメートの名前がよく出てくることからわか

かる。教員による説明には集中できなくてもクラスメートの発言はよく聞く。中学生はクラスメートの頑張りを素直に認めることが、影響も受けやすいので、グループ学習や発表会形式の学習を積極的に取り入れる必要がある。ただし、グループ学習を充実させるためには、個人の読みの持ちよりが不可欠であり、話し合いの質も高めなければならない。この点も課題にしたい。

##### ③問いや指示の言葉について

中学生は、問いの意味を汲み取ることが苦手なので、授業中や学習プリントの「問いや」に反応が大きく左右される。「感想を書きなさい」には、「面白かった」「かわいそう」のように単純な答えしか出てこない。「作者が書こうとしたこと」ではなく「作者はどんなことをねらってこのような人物にしたのか」など、より具体的な問いが必要となる。本実践で、生徒の記述が画一的だと感じたのは、「問いや」によるところが大きいのではないか。今後、改善したい点である。

同様に、グループ学習時の指示も具体的にすべきである。「意見をまとめなさい」ではなく、「共通の意見と少数派の意見も書きなさい」「皆が納得できる意見を作りなさい」など。グループ発表を聞いていると、簡単に予想できる意見が同じような言葉で語られ、何の引っかけもなく発表が終わる。特に発展学習の場合は、正解を探すだけが目的ではないので、読み誤りも含め様々な読みを出していければよい。

(呉武田学園武田中学校高等学校)

資料1

三人目―右大臣阿倍御主人―

右大臣阿倍御主人は、家も豊かで財産だつた。そこで、阿倍御主人は、唐の国(中国)から買物のために日本に来ていた、王けい<sup>①</sup>という人に、「火鼠の皮とかいふものを買って来てほしい」と手紙を書いてお金も送つた。王けいは、その手紙に返事を書いた。火鼠の皮衣のことは、うむに聞いたことはありますが、まだ見たことがありません。火鼠の皮衣が、世の中にあるならば、手に入れてお渡しましう。手に入らなければお金はお返しします。」

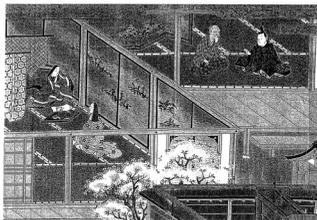
その後、唐から船がやってきて、王けいから火鼠の皮衣と手紙が届いた。手紙には、入を使つてやうとのことで火鼠の皮衣を譯し出しました。でも、お金が足りず、私のお金を加えて買いました。あと五十兩いください。いただけないのなら、皮衣を返して下さい」と書いている。阿倍御主人は、「何をしよう。五十兩なんてむずかな金だ。皮衣を送つてくれて、何とらしいことか」と五十兩を王けいへ返り、皮衣をありがたうに拜んだ。皮衣は、美しく色を塗られた箱に入つている。箱を開けて見ると、皮衣は青色で、毛の先は金色にきらきら輝いている。他の何物とも比ぶれないほどの宝物である。火の中に入れても決して燃えないという噂もあるが、清らかな美しさはこの上ない。

「なるほど、かくや姫がほしがるはずだ。ああ、もったいない」と皮衣を再び箱に入れ、和歌も詠んで持つて行くことにした。自分自身も念りに化粧をし、かくや姫の家に出かけて行った。

皮衣を見たかくや姫は、「本物がとうかわりません」と言いが、翁は「これが本物だと思ひなさい。右大臣をあまり困らせなさんな」と言つて、箱も、「今回はかくや姫も結婚するだろ」と思つて期待している。それでもかくや姫は、「この皮衣を火で焼いてみて、燃えなければ、右大臣を何じて本物だと思ひましよう」と言つてやまずらない。皮衣を持ってきた右大臣はしが承知した。翁が火の中に皮衣をくべると、皮衣はめらめらと焼けて、跡形もなくなつた。

右大臣はこれを見て、翁が草の葉色になつてしまつた。かくや姫は、「思つた通り、にせもの皮だつたのですわ」と喜んだ。そして、右大臣が皮衣と一緒に箱に入れて持つてきた和歌に返事を書いて、箱に入れて返した。

跡形もなくな燃えたとわかつていたら、この皮衣を焼いたりせず、置いて見たでしように……



阿倍のみむらしが持参した「火鼠の皮衣」を見るかくや姫

資料2

「竹取物語」挿絵用プリント<sup>②</sup>

「かくや姫と五人の貴公子」の物語を読もう

目標 かくや姫に恋した五人から二人を選び、その物語を読み、次の問いに答へながら理解深める。

① 人物名 <sup>う べ 大 臣 阿 倍 御 主 人</sup> <sup>み む ら し</sup> <sup>み む ら し</sup> <sup>み む ら し</sup> <sup>み む ら し</sup> <sup>み む ら し</sup>

② かくや姫に贈られた物は？ どんな特徴を持っている？

火鼠の皮衣

火の中に入れても決して燃えない

③ その人物は、贈られた物をどうやって手に入れた？ 裏話はどんな物だ？

王けいといづかに火鼠の皮衣と唐の国で買ってきた

皮衣は、青色で毛の先は、金色にきらきら輝やいてる

④ どうしてウがばれたの？

本物だ燃えなかつた

翁が火の中に入れて焼けたから

⑤ かくや姫の反応とその人物のその後は？

顔が草の葉色になつた

思つた通りだと言ふ

⑥ 自分の感想を書こう。面白かった点、疑問に思つた点、その他

かくや姫は火鼠の皮衣が燃えたと知つて阿倍御主人にたのんだ

どことも火鼠の皮衣がなかったのか疑問におもた

⑦ 30兩は今でいくら？ 50兩は？

本文に「跡形もなくな燃えたとわかつて、たこの皮衣を焼いたりせず置いて見ると、うむにこの書を書いてるので

経年劣化が起きているのなら、無理に挑戦しないほうがいい

